

明治前半期欧州医学留学生について

——東大医学部第一回欧州留学生・新藤二郎の場合——

新 実 藤 昭

明治維新成立とともに、明治政府は日本の近代化、開明化の促進の手段として、欧米に多くの官費留学生を送った。本論文では、総説的に明治前半期の欧州医学留学生について述べるとともに、後半では明治十二年、文部省から推挙され、初めて東大からの医学留学生となった、三人の留学生のうち、今日、あまり知られていない新藤二郎についてやや詳細に報告する。

明治初年頃には海外旅行を願ひ出る者に対して全国統一の規約がなく、明治政府と全国にある各藩とが各々の機関を通じて、海外渡航の免許状を与えて、海外旅行を許可していたが、時の明治政府は、幕末に旧幕府の権限で留学した幕府留学生と、明治新政府派遣の留学生とに一線を画するためにも、旧幕府留学生の総引き上げを命じ、ヨーロッパでは全権公使栗本安芸守（鋤雲）（一八二二—一八九七）に命じ、一斉帰国を断行した。明治二年正月、新政府は全国的に統一した海外旅行許可証を交付するようにして、明治二年六月、佐倉藩からドイツに医学勉学のため留学を願ひした佐藤進にその第一号を交付した。（註）さらに翌三年正月に政府は「外国渡海出願規則」を出し、前記の明治二年正月の「海外旅行規則」

の細則とした。外務省は明治二年に各府藩県から留学に関する意見を提出させ、その回答の結果をまとめた意見書を国に提出して、留学に関する各藩のアンバランスの是正、留学生年齢の若年化の促進、能力と資質を本位とした選抜と派遣の方針を強調したが、政府は積極的な洋行推進策を政策としたため、意見書通りの厳選はできず、留学生の質の低下となった。

医学系留学生については、その中心的母体となった大学東校が、当時の大学権大丞であった岩佐純（福井藩出身一八三六～一九一三）、相良知安（佐賀藩出身一八三六～一九〇六）兩名の建白に従って、明治三年二月、ドイツ医学採用を決定し、同年十月に池田謙斎、大沢謙二、長井直安ら十三名を選出し、ドイツに派遣留学させた（表1、表2）。

翌四年（一八七二）の暮から、翌々年九月にかけて約二年間、欧米に岩倉使節団が派遣されたが、使節団の目的の一つに官費留學生の現状調査があった。^(一) 岩倉使節団が派遣されている間の、明治四年七月、政府は廢藩を断行した。このため各藩出費の留學生学費は明治新政府が肩代りしたため、政府と大蔵省は大量出費を迫られ、官費留學生の減員と整理が当面の問題となった。当時、官費生三百三十余名、その出費費用四十一万四千円の巨額にのぼり、そのうち旧藩からの派遣生が三分の一の百余名を占め、明治五年二月、実質的責任者であった井上馨は、旧藩からの派遣生の多くは各藩が能力、学力の適否も調べず、もっぱら「偏愛の私情」から選んだもので、官費の浪費であるから、在外の岩倉使節団を通じ、出来るだけ淘汰してもらいたいという要請を出していた。^(二)

政府は巨額の出費から、欧米留學生の全員引き上げ、という苦肉の策を取った。この帰国命令について、実際、大学東校から派遣されていた生理学者大沢謙二は「私は明治七年の半ば過ぎに帰国することになった。これは文部省が全ての留學生を呼び返したためである。九鬼隆一（一八五二～一九三一）^(四)と^(注二)という方が、方々に出張して皆引きあげよと命じた。そのわけは留學生の中には、良いものもあったが、多くは出来が良くなかった。それもその筈、やれ何処そこで浪人を何人斬ったの、何処の邸に斬り込んだ時、指を切り落とされたのという輩が報酬の意味で留学したのであるから、ドイツ語

表 1 東校上申の「西洋留学生」(明治 3 年10月12日)

理 学	松 江 藩	北尾 (松村) 次郎	17歳	→ 气象学者・ 東京大学理学部教授
化 学	鹿兒島藩	尾崎平八郎	20歳	→ 帰国後消息不明
化 学	佐 賀 藩	大石良乙 (良二)	22歳	→ 大蔵省官吏
原生学	福 井 藩	今井 (岩佐) 巖	19歳	→ 東京大学理学部教授
解剖学	少 助 教 (福井藩)	山脇 玄	22歳	→ 法律学者・法学博士
人身学	高 知 藩 [在独]	萩原三圭	(30歳)	→ 京都医学校創立・ 小児科医→侍医
原病学	中 助 教 (佐賀藩)	相良元貞	30歳	→ 解剖学修学・ 帰国後早期没 (M. 8)
断訟学	少 典 医	池田謙齋	29歳	→ 東京大学医学部総理
薬物学	豊 橋 (吉田)藩	大沢謙二	19歳	→ 東京大学医学部生理学 教授
治療学	徳 島 藩	長井直安 (長義)	26歳	→ 東京大学薬学科教授
	山 口 藩	荒川邦藏	19歳	→ 法律専攻・官吏・ 地方自治に尽力
外科治療学	佐 倉 藩 [在独]	佐藤 進	25歳	→ (私費で在独中→ この時点より官費) 外科医・ 東京大学第二医院長 →順天堂医院
薬物学, 学校事務	山 口 藩 [在独]	青木周藏	(26歳)	→ (公費で在独中→ この時点より官費) 外交官・ ドイツ公使 政治家

—明治 3 年10月10日, 弁官に対して医学生の西洋修行の伺を提出した。10月12日同意の回答あり。—

[在独] とある, 萩原と青木は, 明治元年, 長崎駐在プロイセン公使の帰国に同行。前者は私費, 後者は長州藩からの派遣, 各個人の出身藩は翌年が廃藩であったことを留意されたい。

表 1 は『東京大学百年史・通史』を参考にした。

なお () のついている年齢は「公文録」に記載はなく, 筆者が他の文献より記載した。渡辺実著『近代日本留学生史』では, さらに「木脇良 (良太郎) 宮崎・佐土原藩 帰国後消息不明」を記載している。「明治 4 年・東大職員録控」では木脇良の名はなく, 佐藤尚中の子息, 佐藤百太郎 (佐倉藩) があげられているが, 佐藤は商学と関税の研修に明治 3 年にアメリカに留学している。

表 2 医学関係海外渡航者 I

明治元年～明治11年 (1868～1878)

明治元年 (1868)	青木周蔵 (独⇒公費) 萩原三圭 (独⇒私費)
明治 2 年 (1869)	☆1869年スエズ運河開通 佐藤 進 (独⇒私費) (青木, 萩原, 佐藤の 3 人は 1869 年より官費生)
明治 3 年 (1870)	原 桂仙 (独⇒私費) 松本 圭 (独⇒私費) 伊東方成 (玄伯) (蘭⇒官費) 池田謙斎 (独⇒官費) 大沢謙二 (独⇒官費) 山脇 玄 (独⇒官費) 大石良二 (独⇒官費) 尾崎平八郎 (独⇒官費) 相良元貞 (独⇒官費) 今井 巖 (独⇒官費) 北尾次郎 (独⇒官費) 荒川邦蔵 (独⇒官費) 伍堂卓爾 (蘭⇒公費) 原 祐民 (独⇒公費) 石川順三 (独⇒公費)
明治 4 年 (1871)	高山紀斎 (米⇒私費) 長井長義 (独⇒官費) 木脇良太郎 (独⇒官費) 名倉 納 (米⇒公費) 鬼頭佐太郎 (独⇒公費) 柴田承桂 (独⇒公費) 長与専斎 (官命で独へ派遣) 萩原三圭 (独⇒公費)
明治 5 年 (1872)	吉田頭三 (英⇒官費・海軍) 橋本綱常 (独⇒官費・陸軍) 太田雄寧 (米⇒私費)
明治 6 年 (1873)	林 研海 (独⇒官費・陸軍) 石神豊民 (英⇒官費・海軍)
明治 7 年 (1874)	高木兼寛 (英⇒官費・海軍)
明治 8 年 (1875)	
明治 9 年 (1876)	石黒忠憲, 三宅 秀, 長与専斎, 岩永省一 (4 人とも官命で米へ派遣) (明治 3 年大村藩留学生・その後米へ。明治 9 年帰国しているので通訳として参加か?)
明治10年 (1877)	小野俊二 (米⇒私費)
明治11年 (1878)	大沢謙二 (独⇒私費) 加賀美光賢 (軍艦に乗船欧米に派遣)

の A、B、C、D、E、F、G、H、I、J、K、L、M、N、O、P、Q、R、S、T、U、V、W、X、Y、Z、の A の字も知らぬ。この者だけ引き抜いて呼び戻すということになる。とどんな乱暴をするかわからぬ。そこで一旦皆引き揚げて、出来の良い者はもう一度試験のうえ再留学させるといふのである。」と述べている。^(五)このため私費で留学を続けた一部の例外を除き、大学東校の医学留学生は殆ど欧州から引き揚げた。^(五三)

二

日本の医学は明治初年からその師を旧来のオランダからドイツに変更した。すなわち、明治二年一月、佐賀藩の相良知安と福井藩の岩佐純の二人が医学取調御用掛を命じられたが、

(一)相良は、佐賀藩主の鍋島直正(閑叟)から推薦され、岩佐は福井藩主の松平慶永(春嶽)からの推挙を得てい

たので、これが有力な背景となった。さらに、二人の藩主はやくから西洋医学に理解を示していた。〔注四〕

(二) これまで訳されていたオランダ医学書は、実はドイツの学問や医学書をオランダ語訳にしたものが大半であった。

(三) ドイツ医学が当時世界最高の隆盛を来している。

ことを理由として、ドイツ医学の採用を決定している。

相良と岩佐はいずれも天保七年(一八三六)に生まれ、二人に共通するのはいずれも佐倉・順天堂塾で佐藤尚中に学び、さらに長崎で、ボードイン A.F. Baudin の指導を受けていることである。二人が医学取調御用掛の職務に関連して当時大阪にいたボードインに意見を求め、熟議の上、ドイツ医学の採用を政府に建言している。相良と岩佐はいずれも二年七月大学校少丞、十月大学権大丞に進んだ。

ドイツ医学の採用は相良と岩佐が単独に決定したのではなく、当時の文教の最高責任者であった大学別当福井藩主の松平慶永(春嶽)は、開成学校教頭フルベッキ G.F. Verbeck (一八三〇～一八九八) に公正なる意見を求めた。フルベッキは(彼自身はオランダ系アメリカ人であったが)ドイツ医学が世界に冠たる医学であることを主張し、相良は同じ佐賀藩の先輩、副島種臣、大隈重信を動かし(副島と大隈は長崎でフルベッキを師として外国語を学んでいる)、さらに岩佐は藩主の松平慶永からの支持を受け、慶永の主張も強くドイツ医学を希望していたので、ドイツ医学の採用が決定的となった。

ドイツはヨーロッパでは比較的後進の国であったが、ドイツ医学の興隆とともに、ドイツの立憲君主国としての国家主義的国情が、当時の明治政府の掲げたスローガンたる富国強兵策に合致したのである。かくして、明治期の医学留学生の大多数は、ドイツ、オーストリアのドイツ語圏に集中される結果を招来した。さらに医学のみならず官費留学生のドイツ志向が強く、絶対主義傾向の強いドイツ・プロシアの国権主義とその体制は、明治政府の国家主義体制を補強しようとする政策と一致し、日本各界(大学、教育界、陸軍など)がドイツ主義の採用をおこなっている。

この傾向は、明治二十年代になると、官費留学生とくに文部省留学生の場合、留学に対する顕著な特色の一つとなり、留学国としてドイツが圧倒的となり、他方私費留学を含む留学生の全体においては、ドイツ以外の西ヨーロッパ、アメリカへ赴くものも少なくなかった。洋行に二つのタイプがあり、官費による学術研究者、富貴者とその子弟が多いヨーロッパ留学と、私費生あるいは貧書生のアメリカ行きとがあり、前者を「官ノ手ニナリ富資ノ財」によるもの、後者を「日本人民ノ自意自発ノ運動ニ出タ」ものである。^(六)

このように、ドイツ医学が日本の医学・医療の軸を成したとはいえ、オランダ医学は長崎医学では明治六年迄、大坂医学では十四年迄その医術を基盤とした。英国医学は日本の医学界の一部には行なわれ、大坂医学では十四年一月、海軍軍医出身で、英国に学んだ吉田頭三が、オランダ医学を英国医学に改め、二十二年迄行なわれた。また、海軍では、明治六年、アンダーソン W. Anderson (一八四二—一九〇〇) がイギリスより招かれ、海軍本病院で治療と生徒の教育を行なった。次いで高木兼寛、吉田頭三、実吉安純、戸塚環海、鈴木重遠などを次々に英国に留学させ、彼らが帰朝するや、その教官に任じ、後に海軍医学を創立した。高木兼寛は十四年五月に成医会講習所を設けて、その所長となった。翌十五年七月有志らとともに、共立東京病院を創立した。二十二年十二月には成医会講習所を成医学校と改称し、さらに二十四年九月に東京慈恵医院学校とし、その校長になった。これが東京慈恵会医科大学の前身で、英国流医学を綿々と引き継いできた。

二

明治四年八月、かねてからプロイセン政府に依頼してあった、二人のドイツ人医師ミューレル L. Müller、 Hoffman が来任した。五年八月、「学制」が公布され、東校は「第一大学区医学校」と改称され、さらに第一大学区医学校は明治七年五月、「東京医学校」となり、同十年四月東京大学医学部となっている。^(注五)

二人のドイツ人医師、とくにミュルレルは日本の医育を主にドイツの陸軍軍医学校の厳格な教則に範を取り、即ち、学生を全て寄宿舎に收容し、制服を着せしめ、貧困学生を給費生とし、定期の試験を励行させるなどを定め、医学学校修学年限は本科五年、予科三年として八年間の教育を全てドイツ語で行なつた。^(七)

この間、明治七年秋、二人のドイツ人医師の任期が切れたが、後任者は来ず、一次的に二人は宮内省お雇い兼医学学校の教師となり、翌年の秋、横浜から帰国した。

ミュルレルが医学学校を改革したとき、五十名前後の生徒が入学したが、八年間という規定の全課程を終了し、明治十一年十一月、東京大学医学部は、初めての卒業式を迎えた。『ベルツの日記』にあるように、初志貫徹した卒業生はわずか十八名であつた。^(八)

東京大学医学部では第一回卒業生を迎えるに当たり、かねてから文部省に官費留学生の欧州派遣を申請していたが、明治十二年一月十九日付で、極めて厳しい限定を付けて許可となつた。^(九)

官費留費留学生規則に準じて、眼科専門学、産科及び婦人科専門学、病理学及び病理解剖専門学について各一名が推荐されることになり、第一回卒業生から募集され、河野衢、新藤二郎（病理学及び病理解剖専門学）、神内由巳、梅錦之丞（眼科専門学）、清水郁太郎（産科及び婦人科専門学）の五名が出願したが、神内由巳は辞退したので他の四名に対して、明治十二年九月、学位及び卒業諮問の成績、ドイツ語、和漢学、体格、品行に関して試験がなされ、その結果、清水郁太郎、新藤二郎、梅錦之丞の三名が推荐され、同年十月中に留学費に関する請書の提出後、十一月に正式許可があり、明治十二年十一月二十日ドイツに向け、横浜を出航した。^(九)^(注七)

貸費留學制度は明治八年から十五年までの制度で、玉石混交のそれ以前の留學生と比較して、大學を選抜または派遣の母体として、専門学修學を目的に海外へ渡つた少数精銳のエリートがその主体で、特に、東京大學醫學部では「お雇い外人教師」に代わり、學生の教育に、臨床の場では患者の治療に、さらには自己の研究にと、一科の教授として日本の近代

表 3 医学関係海外渡航者Ⅱ

明治12年～明治18年 (1879～1885)

明治12年 (1879)	坂井直常 (独⇒官費・陸軍) 実吉安純 (英⇒官費・海軍) 清水郁太郎 (独⇒官費) 新藤二郎 (独⇒官費) 梅 錦之丞 (独⇒官費) 佐々木政吉 (独⇒私費)
明治13年 (1880)	緒方正規 (独⇒官費) 小金井良精 (独⇒官費) 伊東盛雄 (独 ⇒?) 松原新之助 (独⇒官費)
明治14年 (1881)	村岡範為馳 (独⇒官費) 戸塚環海 (英⇒私費・海軍) 高橋 茂 (?)
明治15年 (1882)	三浦守治 (独⇒官費) 高橋順太郎 (独⇒官費) 榊 俣 (独⇒ 官費) 佐藤 佐 (独⇒私費) 林 研海 (有栖川宮随行)
明治16年 (1883)	青山胤通 (独⇒官費) 佐藤三吉 (独⇒官費) 下山順一郎 (独 ⇒官費) 柴田承桂 (独⇒薬学研究のため派遣) 増田広岱 (米 ⇒歯学) 牧 由真 (独⇒私費)(⇒東京大学医学部講師・鍋島 家主治医) 牧 亮四郎 (独⇒私費)(⇒東京大学医学部講師)
明治17年 (1884)	匹田新平 (?) 橋本綱常 (欧米⇒大山巖随行) 難波 一 (欧 米⇒大山巖随行) 橋本長勝 (独⇒私費) 岩佐 純 (独⇒宮内 省から派遣) 岩佐登弥太 (独⇒私費) 榎村清徳 (独⇒私費) 宮本 仲 (独⇒私費) 中島一可 (独⇒私費) 加藤照磨 (独⇒ 私費) 桑田良平 (?) 石坂剛太郎 (?) 森 林太郎 (独⇒ 官費・陸軍) 片山国嘉 (独⇒官費) 飯盛挺造 (独⇒官費) (⇒物理学教授) 丹波敬三 (独⇒私費) (⇒薬学教授) 隈川 宗雄 (独⇒私費) (⇒医化学教授) 長与称吉 (独⇒私費) 岡 見京子 (米で修学⇒私費) 萩原三圭 (独⇒宮内省から派遣・ 侍医)
明治18年 (1885)	浜田玄達 (独⇒私費⇒官費) 弘田 長 (独⇒公費⇒官費) 井 上達也 (独⇒私費) 鈴木孝之助 (英⇒官費・海軍) 戸田玄雄 (英⇒官費・海軍) 北里柴三郎 (独⇒官費) 中浜東一郎 (独 ⇒官費) 長井長義 (独⇒官費) 河本重次郎 (独⇒官費) 宮 下俊吉 (独⇒?) 大西克知 (独⇒?) 三宅 秀 (欧⇒医育制 度研究のため派遣) 片山敦彦 (米⇒歯学)

——は文部省派遣留学生

表 2, 表 3 は『医学関係海外渡航者一覽』222頁「日本科学技術大系」第一法規出版
昭.40 の他, [文献] 1), 3) 4) を参考にした。

化推進のオルガナイザーとしての重要な役割を果たしてきた。

学術界においても、海外留学が専門研究者のキャリアに不可欠の条件の一つとして定着するに至った。(表3)

四

さて、東京大学医学部の最初の官費留学生の一人であった新藤二郎の場合であるが、無事帰国後、東京大学医学部の教授となり、ともに悲劇的な死を迎えた清水郁太郎、梅錦之丞の二人については既に報告がなされているのに比べ、病理学及び病理解剖専門学を専攻した新藤については新藤自身がベルリン到着後約十カ月で肺疾のため初志が貫徹せず、やむなく帰国、帰国後の消息は不明であった。わずかに入沢達吉氏が「明治十年以後の東大医学部回顧談」(昭和三年)という報告の中でその消息を述べているのみである。^(一三)

新藤二郎は安政四年(一八五七)十一月二十二日、三河吉田(現、愛知県豊橋市)に土族浅井辨安の二男として生まれた。慶応二年(一八六六)六歳のとき吉田藩藩医、新藤立揮の養子となった。明治三年(一八七〇)上京、東校に入学。二年間、英学で医学を志す。同五年学制改革とともにドイツ医学を八カ年修学、明治十一年十一月、東京大学医学部卒業。文部省第一回留学生に選ばれる。明治十二年十一月二十日上記の二名および私費留学の佐々木政吉と四名で横浜を出航した。

以下断片的ではあるが、新藤二郎の実父浅井辨安の日記が現存しており、その日記の随所に新藤二郎からの手紙の要点が記載されており、渡欧の頃の様子が理解できる。それによると、清水郁太郎、新藤二郎、梅錦之丞三名の官費留学生、及び私費留学の同級生佐々木政吉の四名は、明治十一年十一月二十日、横浜からフランス郵船に乗船、香港でフランス船ゼームナ号に乗換えてフランスに向かう。年末十二月三十一日マルセイユに到着、翌十二年正月六日ベルリンに到着している。新藤らが途中、正月のバりに三日間滞在し、パリのホテルの五階に部屋を取り昇降に苦労したことや、ストラスブ

ルグで同郷の大沢謙二(二回目留学)に会い、彼とともに一行はベルリンに向かったが、途中ケルン付近で、ライン河渡河の際、河を浮流する大氷塊で、鉄橋が破壊され、十時間ほど遅着となったハブニングも記載されている。正月六日ベルリン到着。同十日からベルリン大学で専門学の勉学にはいった。病理学の師はヴィルヒョウ Virchow であつたらしい。パリとベルリンの街並は当時よりパリの方が美観であつたと報告している。新藤らは横浜出発からベルリン到着まで四十七日間を要している。(森鷗外「森林太郎も陸軍軍医として、その五年後ベルリンに到着するが、彼の「航西日記」でも航海日程四十九日を要している。)

八月に入り、新藤二郎の健康が優れず、八月八日、少量の咯血があつた。数日で全快するも、幸い夏期休暇中でもあり、ベルリン近郊で九月一カ月間転地治療、十月上旬再度ベルリンに戻つたが絶えず風邪気味で気管支炎を併発。周囲からも、日本で静養した方が良いといわれ、新藤も意を決して、急遽マルセイユを十月二十九日発のフランス郵船で日本に向け出港、フランス留学を終えた栗原省吾(一八五三〜一九二〇)^[注九]らと帰国。明治十二年十二月十七日、新藤が東京から郷里豊橋の実父浅井辨安に出した手紙が現存しており、急遽ベルリンから日本に戻つたこと、その時、適当な欧州からの郵船がなく、手紙を出すより自分が帰つて報告したほうが早いと考え、手紙は出さなかつたこと、帰国の途中健康が回復したことなどが書かれている。

それから約三年間豊橋で静養し、明治十六年七月、文部省が新藤の健康回復を認め、九月、新藤は結婚し、新婚の妻むらとともに十月創設された県立松山医学校に、校長兼一等教諭として赴任した。しかしながら、県立松山医学校が経済的理由で明治十九年には廃校となつた。その後、新藤は内務省三等技師として、内務省の医術開業試験委員になつた。帰国後健康を取り戻した新藤に対して、清水郁太郎と梅錦之丞は無事三年間の官費留学を終えて、明治十六年一月二十四日帰国した。いづれも産婦人科、眼科学の東京大学医学部正教授となつたが、ともに肺結核に侵され、数年間で、悲劇的な最後を迎える。

新藤は明治二十二年、公的職業から退官し、豊橋市曲尺手の自宅で開業し、明治・大正・昭和にわたり多数の病人を診療したが、七十歳を越してから豊橋市医師会の長老として、昭和三年三月から医師会長を二年間勤めた。昭和八年二月八日没。享年七十七歳。

最近、北村、小関両氏が『ドクトル・シュルツェ夫妻の手紙』を訳され、そのなかで二カ所に新藤二郎の事をエンマ夫人が述べているのを発見した。一カ所はドイツ留学の直前、同僚清水とともにシュルツェの自宅を訪問しており、もう一度は、やむなく帰国した時、ベルツとともにシュルツェの自宅を訪れ、エンマ夫人にあって^(二四)いる。

文部省派遣、明治十二年度、東京大学医学部からの欧州医学留学生、新藤二郎を中心に明治前半期（東校創立から帝国大学令が制定された明治十九年まで）の欧米への医学留学生について述べた。要旨は第八十八回日本医史学会で報告した。

文献と注

(一) 渡辺 実『近代日本海外留学生史・上巻』二二一頁、講談社、昭和五十二年

〔注一〕なお、第二号は桂太郎が所有するが、桂太郎は長州藩の出身で、国費で留学しようとしたが、これには多くの時日を要することを知り、自費でもってフランスに留学することを長州藩から許可された。明治三年八月、普仏戦争を視察のため大山巖、品川弥二郎とともに米国經由でベルリンに到着。当時、ベルリンでは佐藤進、萩原三吉、青木周蔵がベルリン大学で勉学していた。

(二) 大久保利謙『大久保利謙歴史著作集二・明治国家の形成』一六三頁、吉川弘文館、昭和六十二年

(三) 石附 実『近代日本の海外留学史』一六四頁、ミネルヴァ書房、昭和四十七年

(四) 富田 仁他『海を越えた日本人名事典』紀伊国屋書店、昭和六十年

〔注二〕九鬼隆一 美術行政家、男爵（教育制度の確立、日本美術の保護運動）三田出身、明治六年、官命により欧米に出張、十一年、パリ大博覧会開催に当たり、大博覧会審査官として渡仏。教育制度の改革、晩年、日本美術の保護のため活躍、貴族院

議員、帝国博物館総長などを歴任した。

(五) 金尾清造『長井長義伝』二二七頁、日本薬学会、昭和三十五年

〔注三〕青木周蔵、長井長義などが残った。前者は既に外交官としてドイツ公使、後者は私費留学生となり、ベルリン大学に残った。

〔注四〕佐賀藩主の鍋島直正(閑叟)は藩医伊東玄朴の説得により、痘苗を輸入した。福井藩主の松平慶永(春猷)も藩医笠原白翁により、嘉永二年(一八四九)十一月二十五日長崎から痘苗を輸入し、牛痘の接種を開始した。それ以前、藩主に建白し、幕府の許可を経て清国から弘化三年(一八四六)痘苗を輸入している。

(六) 杉 亨二「我が日本帝国人民ノ将来ヲ前知スルノ説ト方法」『東京学士会院雑誌』明治二十年一月、(三) 石附 実『近代日本の海外留学史』より転写。

〔注五〕明治初期日本の医学校では職員も生徒も外人教師を求めていた。ドイツ医学採用の方針が決定し、明治三年二月十四日(一八七〇・三・十八)に日本政府と北ドイツ連邦公使フォン・ブランドとの間で、プロシアから医学教師二名を三年間の契約で雇うことの約束ができた。雇い入れる医師は軍医ということであったらしいが、あたかも普仏戦争が始まり、約束のドイツ人医師が来日せず、東校の生徒がそれを不満として騒然となった。

明治四年八月二十三日ミュレルとホフマンが横浜に到着。ミュレルは陸軍軍医で外科学、ホフマンは海軍軍医で内科学専攻だった。

(七) 石橋長英・小川鼎三「お雇い外国人」『医学』九二頁、鹿島出版、昭和四十四年

(八) トク・ベルツ編、菅沼竜太郎訳『ベルツの日記』岩波書店、昭和五十四年

〔注六〕文部省は、明治八年五月、留学制度を改正し「文部省貸費留学生規則」を制定、公布した。この規則は官費留学生の質の向上をはかり、少数精鋭主義による派遣の方針に政策を変更したもので、「規則」の要点は、(一)学力、品行、健康を勘案し試験により選抜する。(二)貸費制を明確化し、その返還は二十カ年賦。(三)留学年限は原則として五カ年。この公布時点から、文部省の政策は官選による専門教育課程の修学のみを主体とするものに変化していった。

『ベルツの日記』や入沢達吉の『明治十年以後の東大医学部回顧談』では明治十二年卒業医学士は十八名としているが、東京帝国大学卒業氏名録(大正十五年五月発行)や当時の卒業写真(現存)では二十名が認められる。神内由巳(愛媛出身、卒業後大阪に居た。その後不明)、半井英輔(山口出身、和歌山、福島に居た後、陸軍軍医。大正九年一月二十九日歿で没)

が十八名に加わり二十名となっている。二名はどこかの時点で卒業が認められたものと考えられる。

(九) 東京大学百年史編集委員会『東京大学百年史通史一』五一九頁、東京大学、昭和五十九年

〔注七〕 試験に推挙されなかった河野喬は熊本出身であるが、その後、福井医学校、福井で開業、昭和五年十月三十日福井で没。

(一〇) 新実藤昭「文部省派遣、東京大学初の医学留学生―新藤二郎の場合」『日本医事新報』第三二四六号、五九頁、昭和六十一年

(一一) 長谷川敏雄「本邦最初の産婦人科担当教授・清水郁太郎先生」『日本医事新報』第一五八五号、二五頁、昭和二十九年

(一二) 山賀 勇「我が国最初の眼科教授 梅錦之丞先生」『日本医事新報』第一六四〇号、四十頁、昭和三十年

(一三) 入沢達吉「明治十年以後の東大医学部回顧談」『日本医史学会雑誌』二八四頁、昭和三年

〔注八〕 佐々木政吉(一八五五―一九三五) 杏雲堂の創立者で従兄弟の佐々木東洋の養子となる。清水郁太郎、新藤二郎、梅錦之丞とともにドイツ留学。ライプチヒ、ウィーン、ストラスブルグ、ベルリン大学と転じ、内科と病理学を研究する。十八年

帰国し、帝国大学内科教授、二十四年再度ドイツにわたり、翌年帰国。その後大学を辞して杏雲堂医院で治療に専念。結核治療を専門にした。

〔注九〕 栗原省吾 裁判官、政治家(民法の編纂) 嘉永六年一月、福井藩士の子として江戸藩邸に生まれる。三年に藩の推薦で大学南校に学ぶ。八年にパリ大学法学部に留学し、十二年法学士取得。新藤とともに帰国。その後、民法編纂係、各種官職を歴任し、衆議院議員三回当選した。

(一四) トスカ・ヘゼキール編、北村智明・小関恒雄訳「明治期御雇医師夫妻の生活」(一五) 及び(二三)『日本医事新報』第三一八四号及び第三二三四号、昭和六十年及び六十一年

(更生病院胸部外科)

Japanese Medical Students Studying in Europe from 1868~1886

by Fujiaki NIINOMI

The Meiji government sent abroad young students under one of the accelerated plans for the modernization of Japan following the beginning of the Meiji restoration. In particular in 1870, thirteen medical students were sent from TOHKOU (Tokyo) and other places (Osaka and Nagasaki) to Germany. However, most of them became not medical doctors, but diplomats, officials, statesmen or scientists.

A new medical university system was begun in 1872 by German teachers (Müller & Hoffmann). For eight years, Japanese medical students were educated in German only, and a graduation was held in 1878.

Three students (I. Shimizu, J. Shindoh and K. Ume) were selected from the college of Tokyo university, and they were sent to Germany by the government as medical specialists. This system continued until the system of regulations was changed in 1886. This paper looks at the Japanese medical students studying in Germany from 1868~1886.